

強いチーム創りの着眼点

トイレ掃除からの教え

私事で恐縮だが、独立後オフィスの掃除、特にトイレ掃除を毎朝行うことを習慣化でき、すがすがしい一日のスタートを切ることができている。家庭でこの話をしたところ、「だったら家のトイレもお願いネ！」との妻からの鶴の一声で、今では、家でのトイレ掃除もすっかり定着した。(定着させられた、との表現が正確かもしれないのだが)

そんなこんなで、オフィス、我が家での年末の大掃除を済ませ、すがすがしい新年を迎えたのだが、掃除というキーワードが頭に焼き付いていたのか、鍵山秀三郎著『日々これ掃除』を手にし、久しぶりに目を通してみた。この本は、“平凡を続けることが非凡である”ことを誠に説得力のある語り口で著され、多くの企業経営者から支持された、ベストセラーである。“商いは飽きない”という格言もある通り、平凡を続けることが如何に難しいか、そして価値があるかについて身につまされ、新たな決意と勇気を導き出してくれる良書であることは、言うまでもない。

今回、改めて読んでみて、「普通の人には、大きなことばかりを願うので、大きなものばかりに目がいき、小さな物にはなかなか目がいかない」「私は幸いにして最初から大きなことを望んでおりませんので、日頃から平凡なこと、しかも小さなことに目をとめる、気にかけるということでやってまいりましたので、そのものの持っている生命について他の方が見えない生命すら見えるわけです」という件に触れ、ハッとされた。それは、鍵山さんは物事の本質を見極める達人なんだと、今更ながら気づいたからだ。また、発見したことを放置せず、行動に移すことで小さな成長を毎日積み重ねてこられたのだと。

このとき、私のトイレ掃除の満足感は、鍵山さんのレベルとは全く異なることを痛感した。トイレ掃除に限らず、日頃行っていることから、何かを見出し実行に移すことができているかを振り返ってみると、鍵山さんの足元にも及ばない。読者諸氏はいかがだろうか。大きな事を願うばかりで、小さなことに目を向けることを忘れてはいないだろうか。

企業再生の担当をした方からお話を伺うと、このことと同義のことをよくおっしゃる。再生に秘策はない。目の前にある問題から逃げずに、できることを速やかに処理していくことが全てであると。要するに、小さいことを着実に実行することが企業再生の特効薬であり、このことを怠ったがために、企業は瀕死の状態に陥ったのだ。

2008年は、株価の大幅下落から始まり、景気も陰りが見えていると報じられ、

厳しい滑り出しとなった。社長の経営能力がこれまでも増して問われる年となったのだが、ここで求められることは、鍵山さんの教えではないだろうか。

そして、鍵山さんから学ぶべきことをもう一つ付け加えたい。それは、現場への参加である。管理者になったときに陥ることは、部下からの報告だけを頼りに判断を下す愚である。部下の報告からでは、この真実はほとんど見出せない。その典型的な事例として、社保庁の年金問題に対する大臣の対応が挙げられよう。実務がどんな状況なのかを直接把握もせず、官僚の報告だけを鵜呑みにして記者会見を繰り返してきた挙句の果てに、「ここまでひどいとは思わなかった」と開き直りとも取れるコメントをしたことに辟易とした方は、私だけではないだろう。

ここで重要なことは、リーダーは部下からの報告だけでことを判断せず、自分の目で確かめ、手に触れ、耳で聞く、現場介入を怠らないことである。すなわち、営業マンとの顧客同行、業者交渉、事務処理介入、製造ライン巡回等々の実務参加を鍵山さんのレベルで行うことが、正しい判断を下す上で最も重要なことなのだ。誰でもできることを、誰もできないくらい実行できるチームメンバーを育てることを、今年目標に加えてみてはいかがだろうか。

株式会社アッシュ・マネジメント・コンサルティング

代表パートナー 平堀 剛